

# 論文

## 大学生を対象とした出身高等学校の共学・別学体験に関する質問紙調査

茂木輝順

### 1. はじめに

#### (1) 研究の背景

文部科学省の平成 24 年度学校基本調査によると、全国の高等学校（以下、高校）5,022校（分校を含む）のうち、男子生徒のみ在籍している高校は 128 校（2.5%）、女子生徒のみ在籍している高校は 331 校（6.6%）であり、およそ 9.1%が(制度的もしくは実質的)男女別学校である。なかでも公立高校（国立高校を除く）は、全 3,688 校のうち、男子生徒のみの高校は 17 校（0.5%）、女子生徒のみの高校は 42 校（1.1%）であり、男女別学校はおよそ 1.6%である。

男女別学高校（男子のみ在籍の高校+女子のみ在籍の高校）数の割合は図 1 のとおり<sup>1</sup>、年々減少しており、30 年前(1982 年)と比べると 21.6%から 9.1%に、そのうち、公立高校は 8.5%から 1.6%に、私立高校は 63.4%から 30.2%に、減少している。

このように男女別学校の希少化が進行するなかで、近年、日本では男女別学に焦点をあてた新書が数冊刊行されている。中井俊巳『な

ぜ男女別学は子どもを伸ばすのか』(学研新書 2010 年)、おおたとしまさ『男子校という選択』(日経プレミアシリーズ 2011 年)、おおたとしまさ『女子校という選択』(日経プレミアシリーズ 2012 年)、などである。これらの新書の帯には、「東大合格トップ校の 9 割が女子校/男子校」「なぜ東大合格トップ 10 の 8 校は男子校なのか」「女子だけで学ぶとなぜ強くなれるのか」などと別学の利点が強調される形で販促されている。さらに、数々の海外での調査結果が紹介され、例えば、「男女別学で学んだ生徒のほうが、共学校で学んだ生徒よりも 15~22%も成績が良い」というオーストラリアの ACER(The Australian Council for Education Research)が 6 年間にわたる調査結果として 2000 年に発表したもの<sup>2</sup>や、「社会経済的背景と成績との相関関係は見られず、共学か別学かということのほうが相関関係は強い」というイギリスの OFSTED(The Office for Standards in Education)が公立校 800 校を対象とした 1998 年の調査<sup>3</sup>など、別学における成績の良さとその関連が紹介されている。

図 1・男女別学校数の割合の推移

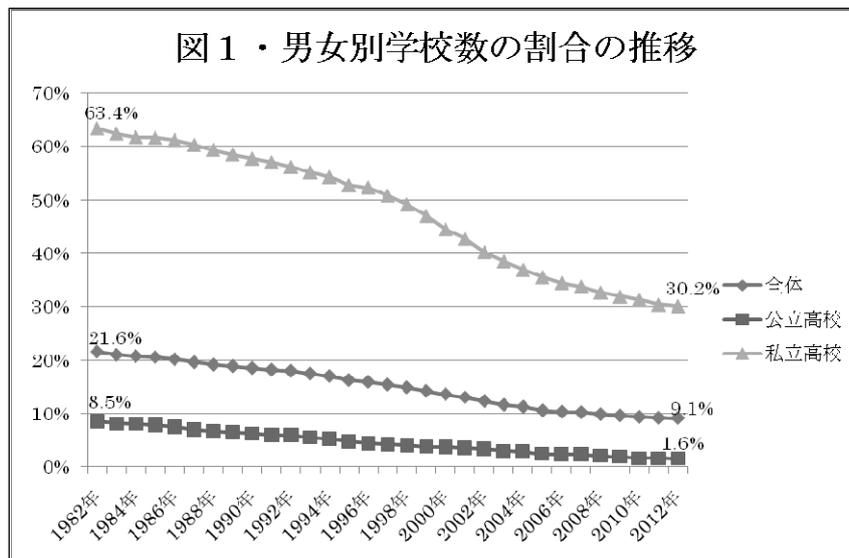


表1 調査枠組み

大項目	中項目	小項目
基本属性		性別
		学年
		恋人の有無
出身高校		高校を卒業した年度
		高校の所在地の都道府県
		設置主体(公立/私立)
		高校の系統(旧制中学・高等女学校・統合系・新設)
		別学/共学
高校生活	学習機会	男女平等の機会
		性教育の機会
	意識	高校生活に満足しているか
		もう一度高校生活を過ごすなら共学か別学か
		共学/別学、男女別クラス/混合クラスに対する意見(自由記述)
共学校	ジェンダ一差	出席名簿
		男女比
		座席
		校舎
		女子クラス/男子クラス/混合クラス
	授業の男女別	体育科
		保健科
学校生活	男女の協力	
別学校	意識	出身校が共学に変わるとしたら
		出身校以外の別学校が共学に変わるとしたら
	生活	同年代の異性と接する機会の有無

その一方で、2011年9月には、アメリカのSCIENCE誌のVol.333にHalpernら心理学者等の研究チームによる“The Pseudoscience of Single-Sex Schooling”(男女別学教育の疑似科学性)というレポートが掲載され、「しっかりとした研究デザインで、男女別学が学業成績を改善させるという証拠を示しているものはなく、むしろ、ジェンダーのステレオタイプ化を進め、制度上の性差別を増長させるという証拠はある」と報告されている<sup>4</sup>。これに対し、SCIENCEのVol.335には、「(Halpernらの)この主張は誤りである」とする反論<sup>5</sup>も含めて、Letters to the Editorが掲載され、さらに、これらに対するHalpernらのレスポンスが掲載されている。今後も、別学/共学論議がどのような展開を見せるか、引き続き注視していきたいと考える。

## (2) 研究の方法

このような背景の中で、大学生を対象に、量的調査によって、高校の共学・別学に関する意識や実態の一端を明らかにしておくことは、子どものジェンダー平等意識形成と学校教育との関係を考察するためにも有益であると考え、大学生を対象に、表1のような調査枠組みの質問紙調査を実施することとした。

調査は2011年7月から12月に、関東圏(埼玉県・群馬県・栃木県・神奈川県)や北陸圏の計6つの大学(国立大学3校・公立大学1校・私立大学2校)で実施した。質問用紙と回収用封筒とともに、この調査の趣旨や調査に参加しなくても何ら不利益を被らないことや回答したくない質問は答えなくてもかまわないこと等を説明した文書を配布し、回答後封筒に厳封して提出してもらった。調査に先立ち、香川栄養学園実験研究に関する倫理審査委員会の承認を得た(承認番号162号)。調査用紙は1225部配布して、1119部回収し

た（回収率 91.3%）。全質問のうち半数以上の質問に回答がなかった 1 部を無効票として、1118 部を有効回答票とした（有効回答率 99.9%）。統計的分析には、SPSSver.19（及び、一部 p 値の算出に Excel2007）を用い、有意水準は 5%とした。

## 2. 結果

### （1）回答者の属性と出身高校種別

回答者の性別は、女性が 820 名（73.3%）、男性が 296 名（26.5%）、その他と回答したのが 1 名（0.1%）、無回答が 1 名（0.1%）であった。出身高校の設置主体別は、国立が 13 名（1.2%）、都道府県立が 758 名（67.8%）、市立が 43 名（3.8%）、私立が 302 名（27.0%）、無回答が 2 名（0.2%）であった。出身高校の共学／別学の種別は、共学が 905 名（80.9%）、別学校が 211 名（18.9%）、無回答 2 名（0.2%）であった。

性別もしくは出身高校の共学・別学の種別が無回答である 3 名を除いて分類すると、共学出身女子は 655 名（58.7%）、女子校出身者は 165 名（14.8%）、共学出身男子は 249 名（22.3%）、男子校出身者は 46 名（4.1%）であった。（以下、この「共学女子」「女子校」「共学男子」「男子校」という分類を出身種別とよぶ。）

### （2）高校生活の満足度

高校時代の学校生活の満足度を次の 5 件法でたずねたところ、1.とても満足している…449 名（40.2%）、2.まあまあ満足している…494 名（44.2%）、3.どちらとも言えない…80 名（7.2%）、4.あまり満足していない…55 名（4.9%）、5.まったく満足していない…28 名（2.5%）で、平均値は 1.84(SD0.94)であった。

出身種別で平均値を比較すると、共学女子…1.77(SD0.88)、女子校…1.73(SD0.93)、共学男子…2.05(SD1.03)、男子校…

2.07(SD1.16)で、最も満足度が高いのが女子校、最も低いのが男子校であった。多重比較法(Tukey 法)で検定すると、共学男子より女子校が( $p=0.004$ )、また、共学男子より共学女子が( $p=0.000$ )、有意に満足度が高かった。

### （3）もう一度高校生活を過ごせるとしたら共学か別学か

もう一度高校生活を過ごせるとしたら、共学と別学のどちらを選ぶかを、次の 5 件法でたずねたところ、1.共学がよい…771 名（69.0%）、2.どちらかといえば共学…149 名（13.3%）、3.どちらでもよい…89 名（8.0%）、4.どちらかといえば男女別学…37 名（3.3%）、5.男女別学がよい…67 名（6.0%）で、平均値は 1.63(SD1.15)であった。出身種別の平均値は、共学女子…1.36(SD0.82)、女子校…2.96(SD1.52)、共学男子…1.32(SD0.80)、男子校…2.57(SD1.33)で、いずれの出身校種でも、平均値は 3 未満で、共学寄りに回答していた。多重比較法(Games-Howell 法)で検定すると、共学女子・共学男子ともに、女子校・

表 2 もう一度高校生活を過ごせるとしたら共学と別学どちらがよいか

		共学が よい*	どちらでも よい	別学が よい*	合計
共学	n	587	42	24	653
女子	%	89.9%	6.4%	3.7%	100%
女子校	n	79	23	63	165
校	%	47.9%	13.9%	38.2%	100%
共学	n	225	15	7	247
男子	%	91.1%	6.1%	2.8%	100%
男子校	n	27	9	10	46
校	%	58.7%	19.6%	21.7%	100%
合計	n	918	89	104	1111
	%	82.6%	8.0%	9.4%	100%

\*…共学は「共学」と「どちらかといえば共学」の計、別学は「別学」と「どちらかといえば別学」の計

男子校いずれよりも有意により共学寄りに回答しているという結果であった(共学女子 vs 女子校、共学女子 vs 男子校、共学男子 vs 女子校、共学男子 vs 男子校、いずれも  $p=0.000$ )。

表 2 のように、出身種別で共学・別学のどちらを選んでいるのか、クロス表を作成すると、共学出身者はおよそ 9 割が共学を選択しているのに対し、別学出身者が別学を選択している割合は、女子校で約 4 割、男子校で約 2 割で、自分の出身ではない共学を選んでいる者の方が多い。

#### (4) 男女平等教育や性教育の機会

高校生時代に男女平等について学ぶ機会があったかを、次の 4 件法でたずねたところ、1.かなりあった…64 名 (5.7%)、2.ときどきあった…372 名 (33.3%)、3.あまりなかった…516 名 (46.2%)、4.ほとんどなかった…161 名 (14.4%) で、平均値は 2.70(SD0.79)であった。出身種別の平均値は、共学女子…2.69(SD0.75)、女子校…2.56(SD0.78)、共学男子…2.74(SD0.85)、男子校…3.11(SD0.74)で、多重比較法(Tukey 法)で検定すると、男子校より他の 3 種別がいずれも有意に機会が多かった(男子校 vs 共学女子… $p=0.002$ 、男子校 vs 女子校… $p=0.000$ 、男子校 vs 共学男子… $p=0.016$ )。

また、性教育の機会がどの程度あったのかを、次の 4 件法でたずねたところ、1.かなりあった…52 名 (4.7%)、2.ときどきあった…535 名 (47.9%)、3.あまりなかった…401 名 (35.9%)、4.ほとんどなかった…126 名 (11.3%) で、平均値は 2.54(SD0.75)であった。出身種別の平均値は、共学女子…2.53(SD0.73)、女子校…2.36(SD0.81)、共学男子…2.67(SD0.75)、男子校…2.54(SD0.78)で、多重比較法(Tukey 法)で検定すると、女子校が、共学女子( $p=0.047$ )や共学男子( $p=0.000$ )より有意に性教育の

機会が多かった。

#### (5) 現在・以前の恋人の有無

恋人の有無を以下の 3 択でたずねたところ、「現在いる」362…名 (32.4%)、「現在はいないが以前いたことがある」…438 名 (39.2%)、「以前も今もいない」…300 名 (26.8%)、無回答…18 名 (1.6%) であった。

これを出身種別にしたのが、表 3 である。共学女子の「現在いる」、共学男子の「現在はいないが以前いたことがある」、女子校と男子校の「以前も現在もいない」が有意に多く、共学女子の「以前も現在もいない」が有意に

表 3 現在・以前の恋人の有無

		現在 いる	現在は いないが 以前いた	以前も 現在も いない	計
共 学 女 子	n	235	253	153	641
	%	36.7%	39.5%	23.9%	100.0%
	調整済 み残差	3.06	-0.22	-2.99	
	p 値	$p=0.002$	$p=0.825$	$p=0.003$	
女 子 校	n	44	57	63	164
	%	26.8%	34.8%	38.4%	100.0%
	調整済 み残差	-1.82	-1.42	3.48	
	p 値	$p=0.068$	$p=0.157$	$p=0.001$	
共 学 男 子	n	73	112	61	246
	%	29.7%	45.5%	24.8%	100.0%
	調整済 み残差	-1.26	2.10	-0.98	
	p 値	$p=0.208$	$p=0.035$	$p=0.325$	
男 子 校	n	10	14	22	46
	%	21.7%	30.4%	47.8%	100.0%
	調整済 み残差	-1.66	-1.32	3.20	
	p 値	$p=0.097$	$p=0.187$	$p=0.001$	
計	n	362	436	299	1097
	%	33.0%	39.7%	27.3%	100.0%

少なかった。

#### (6) 共学校の出身者への質問

共学出身者(905名)に以下の①～⑧についての質問をした。

##### ①生徒の男女比

高校全体の生徒の男女比を次の5件法でたずねたところ、1.ほとんど女子で男子は少数だった…41名(4.5%)、2.やや女子のほうが多かった…191名(21.1%)、3.ほぼ男女半々だった…385名(42.5%)、4.やや男子のほうが多かった…253名(28.0%)、5.ほとんど男子で女子は少数だった…31名(3.4%)、であった。

##### ②校舎の男女別

男女で校舎が分かれていたかをたずねたところ、ほとんどが「分かれていなかった」…884名(97.7%)という回答であったが、少数ながら、「学年によって男女の校舎が分かれている学年と一緒にの学年があった」…4名(0.4%)や、「分かれていた」…10名(1.1%)という回答もあった。

##### ③出席簿

出席簿が「男女別だった」と回答したのは、271名(29.9%)、「男女混合だった」と回答したのは620名(68.5%)であった。選択肢を設けていなかったにもかかわらず、在学中に男女別から混合に変わった旨を書いた者が3名(0.3%)いた。

##### ④体育の授業

体育の授業が男女一緒だったかどうかを次の4件法でたずねたところ、1.男女一緒だった…169名(18.7%)、2.男女一緒が多かった…48名(5.3%)、3.男女別が多かった…164名(18.1%)、4.男女別だった…517名(57.1%)、であった。

##### ⑤保健の授業

保健の授業が男女一緒だったかどうかを次の4件法でたずねたところ、1.男女一緒だった…690名(76.2%)、2.男女一緒が多かった…28名(3.1%)、3.男女別が多かった…23名(2.5%)、4.男女別だった…149名(16.5%)で、選択肢を設けていなかったにもかかわらず、保健の授業がなかった旨を記述した者が4名(0.4%)いた。

##### ⑥学校内での男女が協力的であったか

以下の5件法で、学校内で男女が協力的にすごしていたかをたずねた。1.協力的だった…447名(49.4%)、2.どちらかといえば協力的だった…358名(39.6%)、3.学校内で男女が接する機会がなかった…17名(1.9%)、4.どちらかといえば協力的ではなかった…57名(6.3%)、5.協力的ではなかった…24名(2.7%)、であった。

##### ⑦男女別クラスの有無

学校内に男女別クラス(男子のみのクラスや女子のみのクラス)があったかをたずねたところ、「なかった」が690名(76.2%)、「あった」が202名(22.3%)であった。

回答者自身が男女別クラスに在籍していたかどうかをたずねたところ、3年間男女混合クラスだったのは863名(95.4%)、3年間男女別のクラスだったのは、17名(1.9%)、男女混合クラスと男女別クラスともに在籍した経験があるのは20名(2.2%)であった。

##### ⑧教室内の座席の男女別

男女混合クラスの教室内で、座席がどのように配列されているが多かったのかを、次の4択でたずねたところ、1.男女で分けられていた…22名(2.4%)、2.男女ごとの列になっていた…42名(4.6%)、3.男女が混ざっていた…816名(90.2%)、4.覚えていない・

男女混合クラスに在籍したことがない…20名(2.2%)、であった。

#### (7) 男女別学校出身者への質問

男女別学校出身者(女子校出身165名、男子校出身46名の計211名)には、次の①～③について質問した。

##### ①高校時代に同年代の異性と接する機会

次の4件法で、高校時代に同年代の異性と接する機会がどのくらいあったのかをたずねた。1.かなりあった…8名(3.8%)、2.ときどきあった…57名(27.0%)、3.あまりなかった…82名(38.9%)、4.全くなかった…64名(30.3%)で、平均値は2.96(SD0.85)であった。女子校の平均値は2.98(SD0.96)、男子校の平均値は2.87(SD0.83)で、t検定をおこなったところ、有意差は認められなかった( $t(209)=0.79, p=0.431$ )。

##### ②出身校が共学化するとしたら

もし出身校が別学から共学に変わるとしたら反対か賛成かを、次の5件法でたずねたところ、1.反対…69名(32.7%)、2.どちらかといえば反対…51名(24.2%)、3.どちらでもかまわない…44名(20.9%)、4.どちらかといえば賛成…24名(11.4%)、5.賛成…23名(10.9%)で、平均値は2.44(SD1.34)であった。女子校の平均値は2.27(SD1.29)、男子校は3.02(SD1.36)で、女子校のほうが有意に反対寄りであった( $t(209)=3.44, p=0.001$ )。

##### ③出身校でない別学校が共学化するとしたら

出身校ではない別学校が共学に変わるとしたら反対か賛成かを、次の5件法でたずねたところ、1.反対…11名(5.2%)、2.どちらかといえば反対…21名(10.0%)、3.どちらでもかまわない…144名(68.2%)、4.どちらかといえば賛成…10名(4.7%)、5.賛成…23名(10.9%)で、平均値は3.06(SD0.89)であつ

た。女子校の平均値は2.99(SD0.88)、男子校は3.31(SD0.92)で、女子校のほうが有意に反対寄りであった( $t(207)=2.13, p=0.035$ )。

##### ④出身校とそうではない別学校の共学化についての態度の差

対応のあるt検定で、出身校とそうではない他校の別学校の共学化の態度の差を検定したところ、 $t(208)=8.52, p=0.000$ で、他校に比べ有意に出身校の共学化に反対寄りの態度であった。また、差(他校-出身校)の平均値は0.63(SD1.07)で、女子校の平均値では0.72(SD1.07)、男子校では0.31(SD1.04)で、男子校より女子校のほうが有意に態度の差が大きかった( $t(207)=2.29, p=0.023$ )。

#### (8) もう一度高校生活を過ごせるとしたら共学と別学どちらを選ぶかについてのロジスティック回帰分析

もう一度高校生活を過ごせるとしたら共学と別学のどちらを選ぶかという質問で、「どちらでもよい」と回答した者を除いて、「共学(共学+どちらかといえば共学)がよい」あるいは「別学(別学+どちらかといえば別学)がよい」のどちらを回答する傾向があるのか、他の質問項目との関連を検討するためにロジスティック回帰分析を行った。独立変数には、「性別」、「出身校の共学/別学」、「出身校の公立/私立」、「高校生活の満足度」、「高校卒業年」、「男女平等教育の機会」、「性教育の機会」、「現在の恋人の有無」、「交際経験の有無」を投入し、ロジスティック回帰分析の方法は変数増加法(尤度比)とした。その結果が表4である。

有意な関連がみられたのは、「出身校の共学・別学」と「性別」のみであった。つまり、共学出身者より別学出身者のほうが、また、男性より女性のほうが、別学を選んでいる傾向にあるが、高校生活の満足度や出身校の公立/私立などの他の項目の有意な関連は認められないという結果であった。

表4 もう一度高校生活を過ごせるとしたら共学と別学どちらを選ぶかについてのロジスティック回帰分析

	回帰係数	標準誤差	Wald	p 値	Exp (B)	EXP (B) の 95%信頼区間	
						下限	上限
出身校の共学・別学 (共学=0, 別学=1)	2.88	0.25	134.57	0.000	17.847	10.967	29.041
性別 (女性=0, 男性=1)	-0.74	0.33	5.22	0.022	0.475	0.251	0.900
定数	-3.15	0.20	249.03	0.000	0.043		

従属変数…共学がよい=0, 別学がよい=1 的中率=90.0%

表5 もう一度高校生活を過ごせるとしたら、共学と別学、自分の過ごした学校形態と同じものを選ぶか違うものを選ぶかについてのロジスティック回帰分析

	回帰係数	標準誤差	Wald	p 値	Exp (B)	EXP (B) の 95%信頼区間	
						下限	上限
出身校の共学・別学 (共学=0, 別学=1)	4.288	0.307	194.649	0.000	72.831	39.874	133.026
高校生活の満足度 (1とても満足~5まったく満足していない)	0.946	0.132	51.626	0.000	2.576	1.990	3.335
高校卒業年 (min=1978~max=2011)	0.247	0.105	5.524	0.019	1.280	1.042	1.574
定数	-502.364	211.508	5.641	0.018	0.000		

従属変数…同じ学校形態=0, 違う学校形態=1 的中率=92.2%

そこで、先と同様に「どちらでもよい」と回答した者を除いて、同じ学校形態(共学出身者が共学・別学出身者が別学)を選ぶか、別の学校形態(共学出身者が別学・別学出身者が共学)を選ぶかについてのロジスティック回帰分析[変数増加法(尤度比)]を行った。独立変数は、先と同様である。その結果が表5である。

有意な関連が認められたのは、「出身校の共学・別学」「高校生活の満足度」「高校卒業年」であった。つまり、共学より別学出身者のほうが、高校生活の満足度が低いほうが、高校

卒業年に近い者のほうが、自分の過ごしたのと違う学校形態を選ぶという傾向がみられた。

(9) 高校生活の満足度に関する重回帰分析  
「高校生活の満足度」を従属変数、「性別」「出身校の共学/別学」「出身校の公立/私立」、「高校卒業年」「男女平等教育の機会」、「性教育の機会」「現在の恋人の有無」、「交際経験の有無」「もういちど高校生活を送るとしたら共学か別学か」を独立変数として、重回帰分析(線形・ステップワイズ法)を行った。

表6 高校生活の満足度についての重回帰分析

	回帰係数	標準偏差 誤差	標準化 回帰係数	t 値	p 値	回帰係数 95%信頼区間	
						下限	上限
定数	100.828	26.08		3.866	0.000	49.652	152.003
男女平等教育の機会 (1 かなりあった~4 ほとんど なかった)	0.163	0.036	0.138	4.581	0.000	0.093	0.232
性別 (女=0, 男=1)	0.263	0.064	0.126	4.121	0.000	0.138	0.388
高校卒業年 (min=1978~max=2011)	-0.049	0.013	-0.115	-3.811	0.000	-0.075	-0.024
高校の公立私立 (私立=0, 公立=1)	-0.196	0.063	-0.094	-3.126	0.002	-0.319	-0.073

調整済 R<sup>2</sup>=0.057

従属変数…高校生活の満足度(1 とても満足している, 2 まあまあ満足している, 3 どちらとも言えない,

4 あまり満足していない, 5 まったく満足してない)

表7 高校の男女比別 高校生活の満足度

	女性			男性			合計		
	mean	n	SD	mean	n	SD	mean	n	SD
ほとんど異性	1.75	20	0.91	1.67	3	0.58	1.74	23	0.86
やや異性が多い	1.83	187	0.86	1.95	43	1.13	1.85	230	0.92
ほぼ男女半々	1.70	257	0.82	1.98	124	0.95	1.79	381	0.87
やや同性が多い	1.80	146	0.97	2.14	63	1.00	1.90	209	0.99
ほとんど同性	1.81	37	0.85	2.64	11	1.43	2.00	48	1.05
同性のみ(別学校)	1.73	164	0.93	2.07	46	1.14	1.80	210	0.99
合計	1.76	811	0.88	2.05	290	1.04	1.84	1101	0.93

高校生活の満足度：1 とても満足している, 2 まあまあ満足している, 3 どちらとも言えない, 4 あまり満足していない, 5 まったく満足してない

その結果が表6である。有意な関連がみられた項目は、標準化回帰係数が高かった順に「男女平等教育の機会」「性別」「高校卒業年」「出身校の公立/私立」であった。つまり、男女平等教育の機会があったほうが、男子より女子のほうが、高校卒業年が最近のほうが、私立高校出身より公立高校出身の者のほうが、高校生活の満足度が有意に高くなるという結果で

あった。

(10) 高校の男女比別 高校生活の満足度  
共学出身者に質問した、高校の生徒の男女比の回答より、同性・異性の多さ・少なさという観点から、高校生活の満足度の平均値を示したのが、表7である。参考として、別学出身者の平均値も同性のみとして示した。

男女とも、同性が多い環境(やや同性が多い・ほとんど同性)より、男女半々や同性のみ(別学校)の環境のほうが、平均値が低い(=満足度が高い)という傾向がみられたが、多重比較法(Tukey 法)で検定したところ、どの組合せでも有意差は認められなかった。

### 3. 考察

#### ①本調査の限界

本調査に協力してもらった回答者のうち、男子校出身者は46名と、男子校は現在、全国の高校のうち2.5%(平成24年度学校基本調査)と少数であり、もっとも回答者が集めにくいのも確かであるが、回答者数がかならずしも十分ではない。例えば、高校生活の満足度は、男子校出身者が最も低かった(mean=2.07)にもかかわらず、他の出身種別との多重比較法の検定において、有意差が認められず、男子校とほぼ同水準の共学男子(mean=2.05)と女子校や共学女子との間には有意差が認められた。これは男子校出身者の回答者数の少なさに起因していると考えられる。本調査を解釈する際には、このような限界があることに注意しなければならない点は否めない。そうでなくても、本調査はランダムサンプリングで行われたものではなく、さまざまなバイアスが存在していることが予想される。

したがって、本調査の結果も、以下に述べる本調査についての考察も、このような限界があるうえでのものであることを了承していただかなければならない。

#### ②恋人の有無や婚姻率と高校の共学・別学

大学生の恋人の有無についての、共学高校出身・別学高校出身別の調査結果として、諸富が次のように示している。「明治大学の私の授業で、彼女がいるかいないかを、男子校出身者と共学出身者で比較したところ、共学出身者の約4割が『彼女がいる』のに対し、男

子校出身の学生で彼女がいるのは、何とわずか9%! 一方、女子校出身者がどうかというと、『彼女がいる』割合は共学出身者とほぼ同じ程度でした」。そして、「おそらく、共学出身者より、男子校出身者のほうが、生涯未婚率や生涯童貞率も高いと推測されます」と述べる<sup>6</sup>。

ところが、本調査では、女子についても、共学と別学の間には有意差が認められた。男子については、現在恋人がいるのは、共学男子が29.7%(n=73)、男子校が21.7%(n=10)で、有意差は認められなかったもの( $\chi^2(1)=1.200, p=0.273$ )、交際経験があるのは(「現在いる」と「現在いないが以前いた」の計は)、共学男子が75.2%(n=185)、男子校が52.2%(n=24)で、交際経験は男子校出身者が有意に低かった( $\chi^2(1)=10.102, p=0.001$ )。また、女子については、現在恋人がいるのは、共学女子で36.7%(n=235)、女子校で26.8%(n=44)と、女子校出身者のほうが、有意に恋人がいる率が低く( $\chi^2(1)=5.575, p=0.018$ )、交際経験も、共学女子で76.1%(n=488)、女子校で61.6%(n=101)と、有意に女子校出身者のほうが低かった( $\chi^2(1)=14.073, p=0.000$ )。

この点について、おおたは山田昌弘氏の談として「内閣府が2010年秋に行った『結婚・家族形成に関する調査』によると、婚姻率・恋人がいる率について、男子校出身者と共学出身者の間に差はありませんでした」と説明している<sup>7</sup>。同調査は、未婚もしくは結婚3年以内の20~30代男女計10000人を分析対象とした調査であり、その結果を見ると、共学高校出身の男性4596名のうち、未婚者は3830名(83.3%)、既婚者は766名(16.7%)、男子校出身者798名のうち、未婚者は662名(83.0%)、既婚者は136名(17.0%)で、 $\chi^2$ 検定で有意差は認められない( $\chi^2(1)=0.069, p=0.793$ )。その点では「男子校出身者のほうが生涯未婚率が高い」という

諸富の推測は誤りであろう。また、女性についても、共学高校出身の女性 3516 名のうち、未婚者は 2756 名 (78.4%)、既婚者は 760 名 (21.6%)、女子校出身者 936 名のうち、未婚者は 725 名 (77.5%)、既婚者は 211 名 (22.5%) で、 $\chi^2$  検定で有意差は認められない ( $\chi^2(1)=0.373, p=0.542$ )。さらに、交際経験の有無についても、これまで交際経験が無いのは、共学高校出身の男子では 1179 名 (25.7%)、男子校出身者では 198 名 (24.8%) とほぼ同率で、両者の間に有意差は認められず ( $\chi^2(1)=0.069, p=0.793$ )、女性についても、交際経験が無いのは、共学高校出身の女性では 529 名 (15.0%)、女子校出身者では 129 名 (13.8%) で、有意差は認められない ( $\chi^2(1)=0.937, p=0.333$ )。このように、大学生時代の恋人や交際経験の有無に、高校の共学/別学による差があったとしても、それはいずれ解消されると考えられるかもしれない。

ところが、同じく内閣府『結婚・家族形成に関する調査』では、最終学歴別にみると、交際経験のない人の割合や 30 代の未婚者の割合は、「大学・大学院」は「中学校・高校」や「専門学校・高等専修学校・短期大学」より低いことや、年収に着目すると、男性の既婚率が、年収 300 万円未満で 8~9% と最も低く、年収 300 万円以上になると約 25~40% 程度となり大きな開きがあることも明らかにされている<sup>8</sup>。そして、現在の別学高校の多く、とりわけ男子校の大部分が、進学校であり、超難関大学に多数の進学者を送り出している別学校も少なくない。つまり、全体的にみれば、(大学進学率が高くない普通科高校や職業科高校を含んだ)共学出身者より別学出身者のほうが、最終学歴や年収が高くなることが予想され、最終学歴や年収といった点を考慮にいれば、既婚率や交際経験率がほぼ同率ではなく、共学出身者より別学出身者のほうが高くなってしかるべきだという仮説も成り立ちうる。こういった最終学歴や年収など、

婚姻率や交際経験率を上下させる影響を統制したうえで、共学出身者と別学出身者の婚姻率や交際経験率を比較し、別学校出身による不利が解消されているのかどうかを検討する必要があると考える。

また、イギリスでは、1958 年と 1970 年生まれを対象としたコホート研究によって、既婚男性が 42 歳までに離婚や別居に至る危険率が、共学出身者に比べ男子校出身者のほうがやや高い傾向にあるという調査結果も報告されている<sup>9</sup>。日本においても、婚姻率や交際経験率だけではなく、その後の離婚率や DV の発生率、結婚に対する満足度など、夫婦やカップルの関係性やその作り方についても共学出身者と別学出身者との同異を検討する必要があると考える。

### ③高校生活の満足度と高校の共学・別学

高校生活の満足度についての重回帰分析では、「高校の共学/別学」には有意な関連は見られず、有意だったのは「男女平等教育の機会」「性別」「高校卒業年」「出身校の設置主体(公立/私立)」であった。有意でなかったから影響がないというわけではないが、共学/別学ということよりも、別の要因のほうが高校生活の満足度に大きい影響を与えるといえる。

また、もう一度高校生活を過せるとしたら共学と別学のどちらを選ぶかについてのロジスティック回帰分析で、有意な関連が得られた項目は、「出身校の共学/別学」と「性別」のみであった。また、自分が過ごした学校形態(共学/別学)と同じものを選ぶか違うものを選ぶかについてのロジスティック回帰分析では、高校生活の満足度が低く、どちらかという卒業年が最近の者のほうが、違う学校形態を選ぶ傾向がみてとれた。限られた質問項目を独立変数とした回帰分析ではあるが、全体的にみれば、別学を選んでいるのは、別学出身者(特に女子校出身者)で、高校生活の満足度が高く、どちらかという高校卒業

から年数が経っている者であるという傾向がうかがえた。

埼玉県では2002年3月に、公立高校一律共学化についての勧告が埼玉県男女共同参画苦情処理委員から出され、結果的には、2003年3月埼玉県教育委員会は「当面は共学化せず、現状を維持する」と勧告に対する報告を出している。その際、公立別学高校のPTAやOB・OGが中心となって、「共学と別学高校の共存を願う県民の会」を結成し、二十七万人の署名を知事に提出するなど、別学高校の存続を求めている運動を展開した。本調査で、共学出身者の約9割、別学出身者でもおよそ半数が、再度高校生活を過ごすなら共学を選択していたことから考えても、別学校の維持を支持しているのはほぼ別学出身者（なかでも高校生活の満足度が高かった別学出身者）であると考えられる。高校生活の満足度が高かった別学出身者にとって、自分の出身校が別学から共学に変わることの心理的抵抗感是非常に大きいであろうが、それは、出身校が廃校になることや、(これまでの事例も多くないし、今後も現実的ではないが)共学校出身者の出身校が共学から別学に変わることを感じる心理的抵抗感とそれほど変わらないだろう。この点を明らかにするために、今後、実際にそういった体験がある人がそれをどう思っているのかをインタビュー調査などによって明らかにしていくことも必要であると考ええる。

また、これまでの「隠れたカリキュラム」研究等が明らかにしてきたように、共学であるからといって、必ずしもそれがジェンダー平等に結び付くわけではない。かといって、例えば、家庭科や音楽・美術などの芸術系教科や、文化系の部活動、体育系でも陸上や水泳などの個人種目や弓道やダンスなどの（共学校でも学校によっては男女混合で行っている）種目の部活動を、わざわざ男女を別に行うことの利点や欠点は、日本ではあまり議論されていないように思う。共学校では必

要に応じて、男女を分けることが可能だが、別学校では必要に応じて異性を加えるというのはかなり難しい。共学校においても、どのような場面で男女を分けた方が良いのか／分けてはならないのか、といった検討や、そのような様々な形態が結果的に高校生活の満足度などにどう関連があるのかといった研究も、今後、別学／共学論議を深めるために必要になってくると考える。

## 謝辞

本調査の回答に協力いただいた大学生のみなさまに心から感謝いたします。なお、本研究は、平成21～23年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究」（研究代表者・橋本紀子、課題番号21330183）の一環として行われたものであり、本質問紙調査の企画・実施は、以下の研究メンバー（橋本紀子、田代美江子、井上恵美子、木村浩則、杉田真衣、良香織、森岡真梨、丸井淑美、茂木輝順）で行い、本稿の執筆は茂木が担当した。

---

【註】

- 1 文部科学省（文部省）の学校基本調査より作成。  
この調査における男女別学校とは、男子校あるいは女子校という分類ではなく、現実に在学している生徒の状況による分類である。
- 2 おおたとしまさ『女子校という選択』日経プレミアシリーズ 2012年 p.32
- 3 おおたとしまさ『男子校という選択』日経プレミアシリーズ 2011年 p.180
- 4 DIANE F. HALPERN, et al. "The Pseudoscience of Single-Sex Schooling", SCIENCE, Vol.333, 2011
- 5 HYUNJOON PARK, et al. "Single-Sex Education : Positive Effects", SCIENCE, Vol.335, 2012
- 6 諸富祥彦『男の子の育て方』WAVE 出版 2009年 pp.192-194
- 7 おおたとしまさ『男子校という選択』日経プレミアシリーズ 2011年 p.87
- 8 内閣府内閣府政策統括官（共生社会政策担当）『平成22年度 結婚・家族形成に関する調査報告書』2011年 同調査の最終学歴や年収と婚姻率や交際経験率の関係についての言及は、学生を除いて分析した結果から導き出されており、別学／共学の婚姻率や交際経験率は、年代別に（20代と30代とで別に）示されていないので、本稿においては、これ以上の検討を進めることができない。
- 9 D. Leonard, "Single-sex and co-educational secondary schooling: Life course consequences?" Economic and Social Research Centre (ESRC) Report, 2007 ただし、女性にはこのような傾向はなかったという。